

四谷の

千枚田だより



第197号



未来へつなぐ「国連生物多様性の10年」せいかりレーキックオフイベント「あいち・なごや生物多様性EXPO」

一月十一日、十二日、名古屋国際会議場を会場に生物多様性に取り組む県民・市民・NPO・企業・関連団体・教育機関などを対象にUNDB・J、環境省、愛知県、名古屋市主催で開催された。



大村知事さんと(写真上)

COP10あいち・なごや開催については「四谷の千枚田」を愛知県の里山と位置付けた誘致活動に貢献、またエクスカーションの場として世界各国から訪れるなど、大きな役目、知名度を果たしたこともあり、参加を要請された。

目的は「愛知目標」の目標年であり「国連生物多様性の10年」の最終年でもある二〇二〇年に、関係機関と協力し、COP10以降に本県の多様な主体が「愛知目標」の達成に向けて取り組んできた成果を広く発信することにより、地域全体の気運を盛り上げ、今後の取組の促進を図るためのシンポジウム、分科会として催された。

四谷の千枚田からは原田佳治、原田英史、松下 誠、柴田賢治郎、小山舜二が参加、生物多様性のブース(73ブース)出展とステージ発表を行った(写真参照)。ブースでは、十年前の開催時を賑やかした「アサヒスーパードライ」の一缶一円環境支援のポスターや八雲たんごさん、地元西川勝也さんデザインのタペストリー、長机一杯の資料等々を展示した。訪れる人々も千枚田一色のブースを見て「二度も行った」とか「癒される」とか絶賛され、スタッフも

結構、おだてに乗っていたようだ。

ステージ発表では、冒頭に客席に向かって十年前のCOP10開催は、ここ(国際会議場)を会場に開かれた。私は誘致活動のなかで「生物多様性」はあまりにも重い、せめて「生きものと共生した」程度では...と提案もしたが、今、この十年を振り返ると「生物多様性」という文言がこれほどまでに浸透するとは思っても及ばなかったし、これで良かったんだと思つてもいる。今日は十年の成果ということでもあり、四谷の千枚田の取組を紹介すると、農薬散布などの影響で減少した生物を甦らそうとカエルを主役にしたビオトープの造成を行った。この効果が波及してヘビやイモリがオタマジャクシやカエルを追うことで除草効果が生じ、生き残ったカエルが稲に上りウンカなど害虫を一日に二百匹も食べてくれれば殺虫剤の散布はしなくてもよく「湧き水、天日干し、生きものと共生した体に優しいコメ作り」の実践が可能だ。また、千枚田一枚一枚をビオトープと位置づけ、一度、人の手で壊した自然環境を取り戻すため、「駄目だ」とあきらめるでなく、手心を加えた自然再生に取り組んでいる、と発表した。

令和二年連谷地区新年交礼会 及び「デイスカバー農山漁村(むら)の宝」コミュニティ部門選定 受賞報告会

一月二日、連谷会館において「連谷地区新年交礼会」(三十三名出席)が催された。長谷川諭連谷区長の新年の挨拶に続き、小山保存会長から平成九年鞍掛山麓千枚田保存会設立以降、連合・四谷地域の皆方、お一人お一人のご支援のなかでの各種活動が認められ「むらの宝」コミュニティ部門に選定され、昨年十二月三日、首相官邸において選定受賞を賜りましたことを報告した。

参加者は一献傾けながら公共施設の跡地問題、過疎化などの話題に熱論を交わし、ほろよい機嫌の交礼会であった。

田起こし&田んぼ飛び

一月十日、鳳来寺小学校四年生(十名)五年生(十一名)は学習田の田起こしと田んぼ飛びを行った。

同校の五年生は千枚田で稲作、自然体験学習を行っており、今回は新学期から野外学習に取り組み四年生が先輩の五年生からの引継ぎのための学習で、田起こし、田んぼ飛びに勤しんだ。

児童たちは、恒例行事になっていた

る「田んぼ飛び」に四年生になれば日本三大石積み、急傾斜地の「四谷の千枚田」を飛べると胸を躍らし、飛び降りたり、駆け上がった。飛べない(舞)も七十九歳、さすがに子供たちには付いていけないし、年齢を感じた。



害獣駆除 個体数の削減

一月十九日、千枚田の入り口「池田」で村雲宜允さんが管理する檻で百キロ級のイノシシを捕獲した。

獲ったの連絡に小山秀夫、高橋孝行も「良かった、よかった」と駆け

寒中お見舞い申し上げます

昨年一年を鑑みますと、年明けとともに千枚田の彼方此方で俄か九六銹サが田んぼの石積や農機具の搬入路などに励み、建設ラッシュがみられた。空前の空梅雨で鳳来湖の貯水量0%を記録。千枚田も田植えも儘ならず逼迫した空気が流れた。そこは、湧き水の千枚田、何とか田植えはできたものの一番大切な太腹、交配、出穂の時期に明けも暮れでも雨ばかりで実入りが心配。梅雨明けと同時に記録破りの猛暑熱帯にニュースが沸いた。三年続きの天候不順。棚田の百姓は「お天気に虐められ、ひどい目にあつたぞん、やんなっちゃった。などと、悪口を叩きながらも、今は、何のその、ケロッと忘れ、「よたくれ田んぼのおかげで丈夫健康だ」などと嘯きながら日本一管理された田んぼに出掛けている。六月の「お田植感謝の夕べ」も十五年間中止なし、これも、地域住民の勢いや、お天道様の御陰と。十二月の収穫感謝祭は地域住民はもとより「河西忍の愉快な仲間たち」の生バンド演奏など、兎にも角にも楽しい師走の一日を醸し出した。中部環境推進五市サミットでは基調講演。三遠南進サミットでは「獣害とくらし」を提議した。嬉しいことに五十歳の誕生日に棚田を「むらの宝」として保存活動開始、活動二十九年度の十一月三日、首相官邸において農水省デイスカバー「農山漁村(むら)の宝」コミュニティ部門に選定受賞(全国九百三十一件中三十一地区)。同時に東海農政局長選定受賞を果たした。「四谷の千枚田だより」も十六年間発行、五月には二百号達成見込み。保存活動開始以来二十九年、「千枚田と皆さん」の安泰を願い、早朝の千枚田一周。日一日と短くなる余生を堪能しています。皆さんが、お幸せであることを願います。

令和二年一月吉日



付け、四人で解体に精をだした。

千枚田周辺を荒らす「曲者」を捕獲したことで周辺住民は大喜びであるし、保存会としても各種行事(パワトレ・社員研修・灯そう千枚田等々)が山積、肉がなかったらシシ汁が振舞えない、「どうせるずらあゝ困ったテン」と悩んでいた矢先の朗報。ふんとに宜允さま様で、感謝感激の至りである。

行 令和二年二月一日
鞍掛山麓千枚田保存会
発 文 責 小山舜二